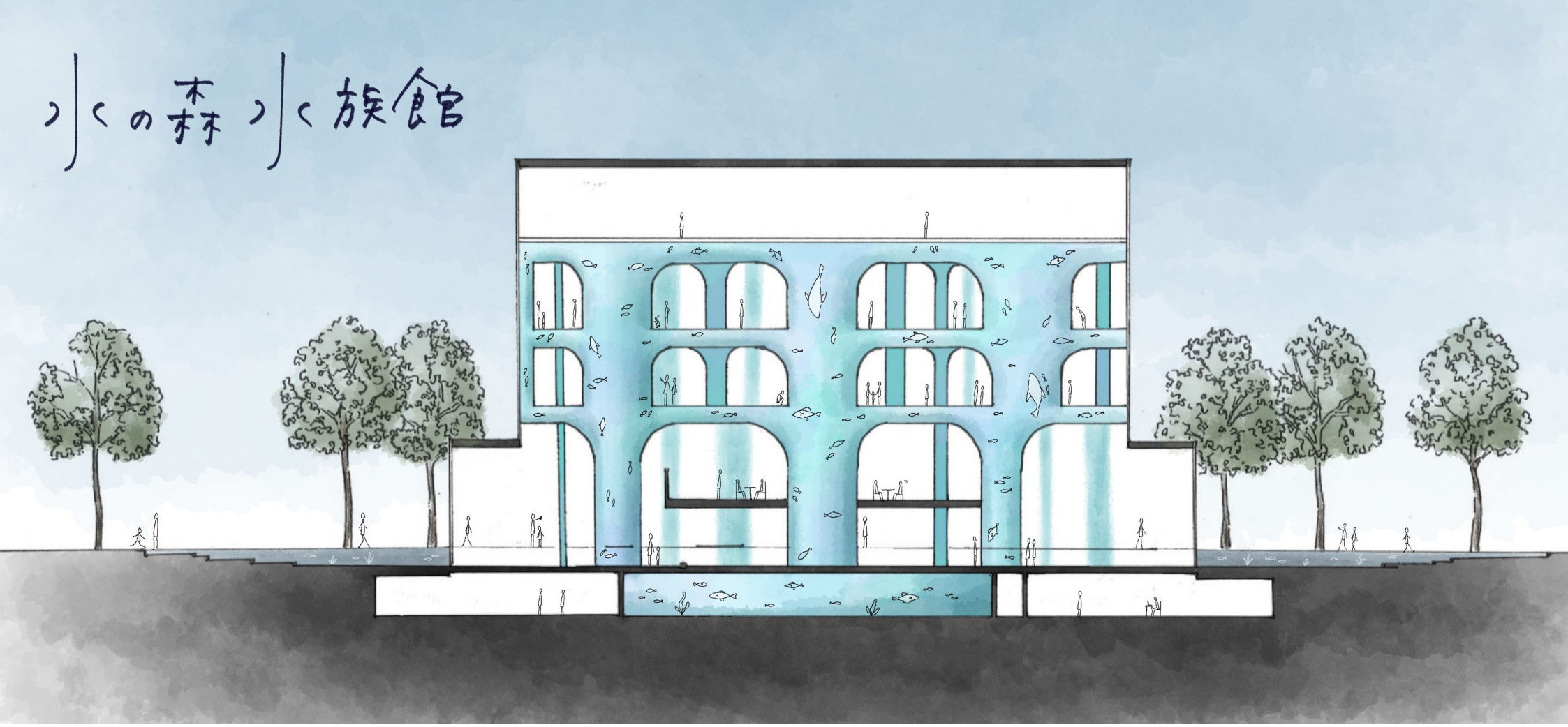
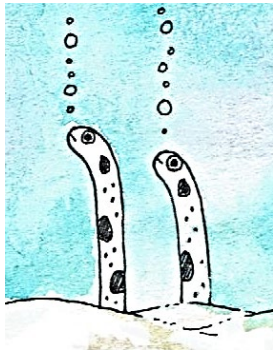
水の森水族館



コロナ禍における水族館の変化

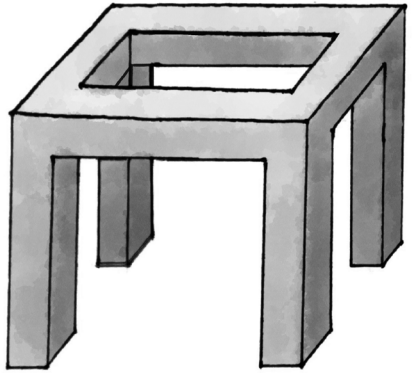
コロナ禍において水族館にも変化がもたらされた。水族館は休館においやられ、普段ヒトと身近な環境にいる水族館のサカナたちは「ヒトがいない」という変化により、餌を食べなくなり水槽の隅から動かなくなるなどの様子が世界各国で見受けられた。また、すみだ水族館のチンアナゴは長期の休館により砂から顔を出さなくなった。チンアナゴはもともと警戒心の強い生き物であるが、館内のチンアナゴは来館者に慣れており、ヒトが近づいても動じていなかった。しかしコロナ禍によりヒトがいない環境で過ごしたチンアナゴは飼育員が近づくだけで砂の中に隠れるようになった。姿が見えないことでチンアナゴの健康管理ができなくなってしまった。これらのことからサカナもヒトを観察しており、ヒトの服や反応を見て楽しんでいるという説が上がってきた。水族館とは単純に「見る」「見られる」という関係ではなく、ヒトとサカナが共存した環境なのだ。



ダイアグラム

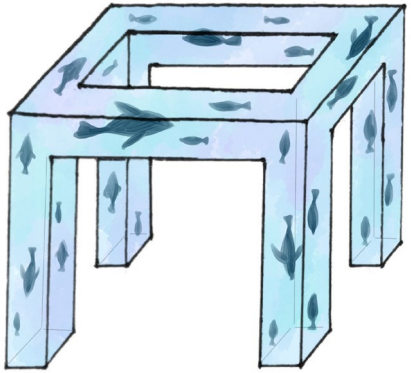
柱・梁水槽

従来の建築



柱梁がコンクリート

本提案



柱梁が水槽

従来の建築では柱や梁は建築物を支える部材でしかない。本提案ではこの柱と梁を水槽にした。柱と梁は建築全体で一続きに繋がっているため、水槽空間が繋がり、サカナにとっての自由な空間となる。

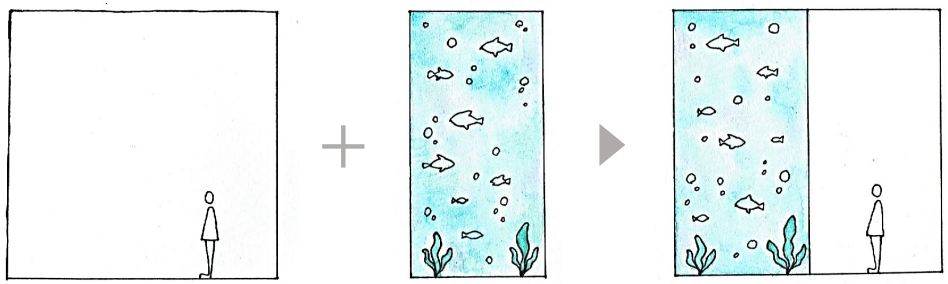
森のような水槽空間

大小さまざまな木々を縫い、森の中を抜けるような空間をイメージし大きさの異なる水槽を配置した。

水槽の構成

従来の水族館ではヒトの空間にサカナの空間（水槽）が付属するような構成だが、本提案では構造体というサカナの空間にヒトの空間を付属させるものになっている。こうすることでサカナにとっては開放的な、ヒトにとっては海の中に入り込んだような空間が生まれる。

従来の水槽

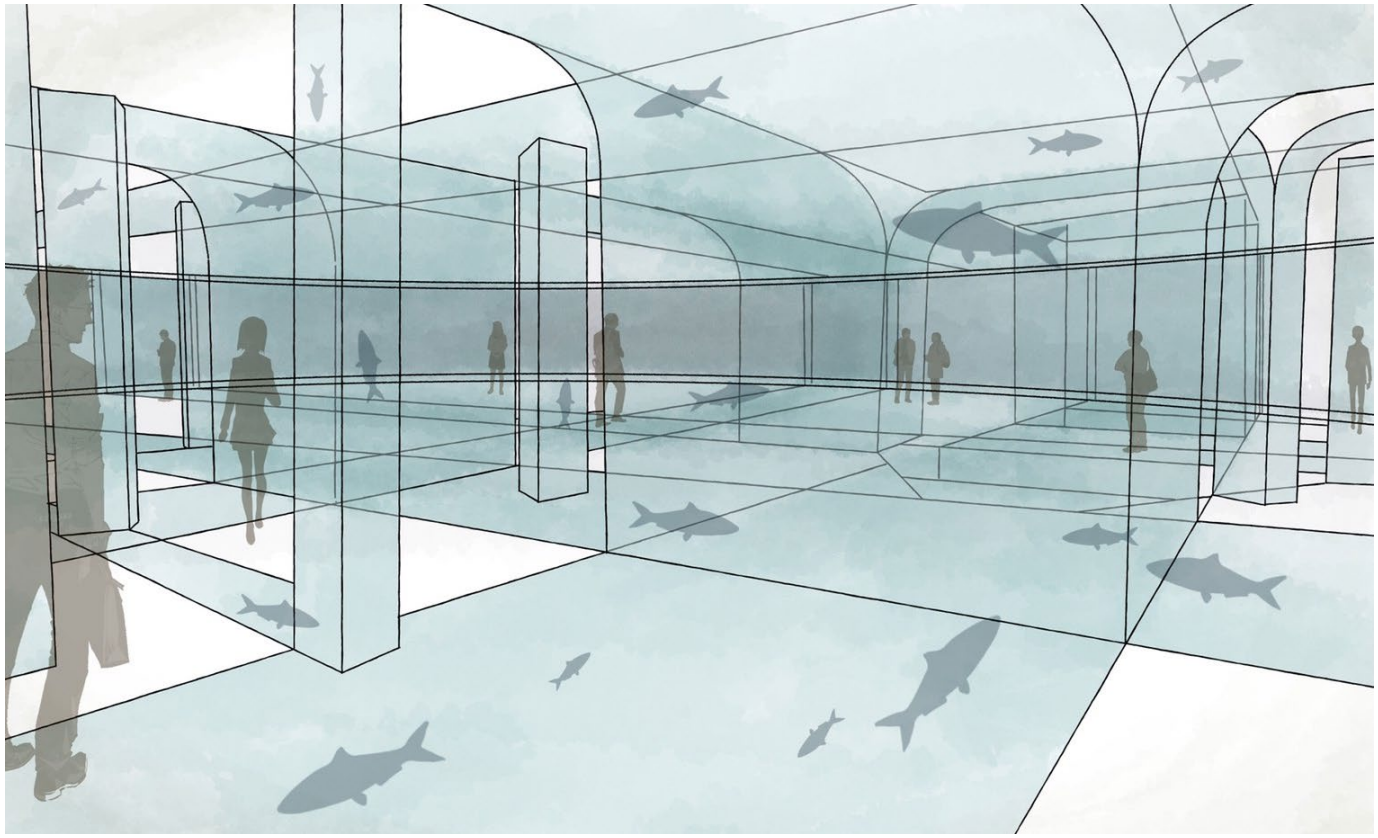


ヒトの空間　サカナの空間

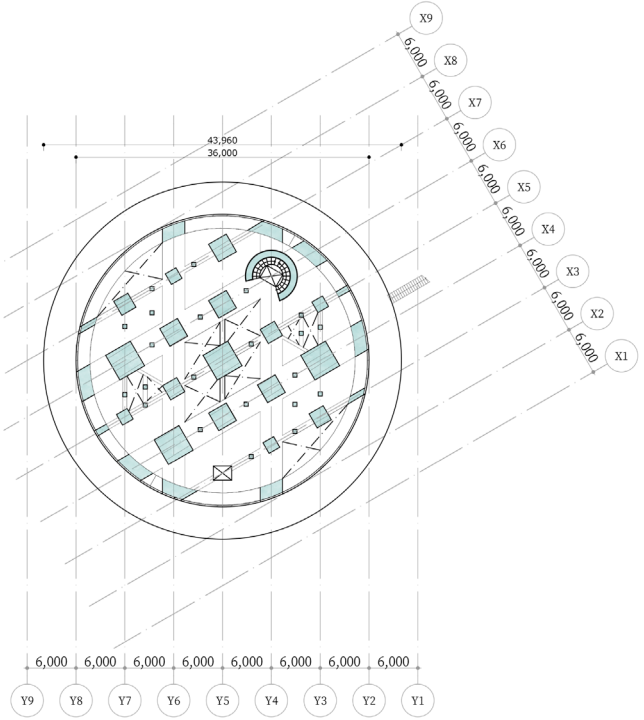
本提案

サカナの空間　ヒトの空間

パース・平面図



大小さまざまな柱水槽による森のような展示空間
▼展示空間平面図



計画地

敷地条件
横浜市中区　赤レンガ倉庫の隣地　敷地面積：14,410㎡

計画地情報
赤レンガ倉庫の隣地ということで海には面していないが、水際空間として非常に開放的である。また、観光客が多く訪れる観光スポットとなっている。独自のイベントも盛んであり、フリマやビアガーデン、スケートリンクなどが季節によって設置される。山下公園から続く遊歩道が整備されており、散歩やジョギングをする人が多くみられる。しかし交通アクセスが悪く、地元の人々はなかなか訪れる機会がない状況だ。中区もまちづくりの課題点として、「水際方向への公共交通が少ない」「地域内の交流が少ない」などを挙げている。